8-2	
主題	養護老人ホームにおける触法高齢者受け入れの実態調査とその背景から見える今後の役割について
副題	終の棲家が必要とされる理由とは

キーワード1 触法高齢者	キーワード2 養護老人ホーム	研究期間	3ヶ月
--------------	----------------	------	-----

法人名	社会福祉法人 安立園 (あんりゅうえん)		
事業所名	安立園養護老人ホーム		
発表者： 幡野 光希 (はたの みつき)	アドバイザー：関口 陽子 (せきぐち ようこ)		
共同研究者：なし			

電話	042-368-7211	FAX	042-334-6352
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	安立園は東京都の真ん中に位置する府中市にあり、養護・特養・ショート・在宅・包括などの他に保育園もある総合施設です。相互交流を積極的に行っており、“芽生えてふれあい、老いて安らぎ”をテーマに、0歳から100歳までの方が元気に過ごされています。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

安立園は、前身が更生保護団体であり、「受刑歴があり、誰も引受人がない方を保護することは社会福祉事業家の役割」という考えで設立している。その精神は今に引き継がれており、受刑歴のある方が約1割いる。近年、刑務所内の高齢化が進み、刑期を終えた高齢者の行き場に困窮している現状がある。

一方で、養護老人ホーム（以下、養護）は各区市町村の福祉事務所から措置による入所施設であるが、その知名度は低く、また、平成17年4月より措置費が一般財源化され各区市町村に税源が移譲されてから、各地で「措置控え」が起きており、本来ならば養護の入所が妥当と思われる高齢者も入所につながらず、制度の「狭間」に埋もれた高齢者が数多く存在している。

また、自立支援よりも「終の棲家」としての役割が大きくなってきており、施設としての在り方を見直す声が高まっている。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

＜目的＞

養護の入所条件として、「65歳以上の環境上の理由及び経済的理由により、居宅において養護を受けることが困難なもの」とあり、その中でも特に地域に溶け込むことが難しい触法高齢者に注目し、養護の役割として触法高齢者の受け皿となれることを明確にする。

そのための対応力を構築するとともに、社会に訴えることで、地域社会にとって必要不可欠な施設であることを提唱する。また、当事者の心境をくみ取り、1番大切な触法高齢者の気持ちに寄り添った支援を目指す。

＜仮説＞

本研究を行うことで、養護を取り巻く環境を把握し、対応策を講じることで、福祉社会にとって欠かせない存在であると内外にアピールできないか。また、深刻な問題である「措置控え」を解消し、入所者・施設の双方にとって有益なものとならないか。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①高齢犯罪者（60歳以上）の実態を把握す

るための文献調査

②更生保護施設及び、刑務所側の問題を把握するための文献調査

③都内の全養護に対し、入所中の触法高齢者の割合を把握するためのアンケート調査

④現在入所している触法高齢者へ、心境の変化などの聞き取り調査

《4. 取り組みの結果》

① 一般刑法犯について、検挙人員の年齢層別構成の推移（最近20年間）を見ると、60歳以上の高齢者の割合が、平成6年は6.3%だったのに対し、25年には24%を占めている。

罪名は窃盗が全体の52.9%を占めており、再犯する割合も上昇傾向にある。

② 平成22年に実施した更生保護施設に対する調査の結果、社会福祉との連携について、「必要ない」と回答した施設はなく、「いっそう必要」との回答が64.8%だった。また、福祉関係者との連携で課題と考えることについて、「受け皿の確保」が93.5%とほぼ全ての施設から回答があった。

さらに、刑務所内でも高齢化が進んでおり、多くの人たちが帰る家も身寄りもなく、満期釈放で刑務所を出ては再犯をしてまた戻るケースが多い。地域や家族からも見放され、生きるために再犯を余儀なくされる。「困窮」「孤立」「不安」の現れといえる。

③ 都内の養護全34施設からの回答率は53%。そのうち、触法高齢者の入所比率は全体で3.0%（約50名）、その中で当施設は9.1%（10名）である。

各施設で処遇方法は異なるが、金銭の管理、外出の制限、職員とのコミュニケーション等で生活の安定を図りながら、自立に向けた支援を行っている。

④調査協力者：A様（入所10年目）91歳
33歳ごろより窃盗を繰り返し、76歳まで刑務所を出入りする。80歳で更生保護安立園に入所。以降、再犯はなく安定し

た生活を送り、現在は特別な生活の制限もなく、施設内で自立した生活を送っている。

A様は当時を振り返り、「立ち直る時はいくらかでもあったが、惰性でやってしまう。今考えればバカな事をした。」と語った。また、入所時の様子について、「（刑務所の）最後の担当の事はよく覚えている。あの人ののおかげで安立園に入所する事ができた。もし入所に至らなければ、満期出所で80歳。望みもなくこの先の見通しもない抜け殻のような人生だっただろう。」と話す。

最後に今の心境について、「今まで職員に迷惑をかけたくないという思いで生活してきた。お世話になった人への恩返しだと思い、縁を大事にしている。」と話された。

《5. 考察、まとめ》

触法高齢者の養護の入所比率はまだまだ低いが、受け皿となれることを再認識し、終の棲家としての機能を向上して行く必要がある。ただし、そのための体制や職員の教育など、課題は山積みである。仮に今回のA様の事例が成功例とするならば、A様のように思い、考えて生活を変えていくための支援方法などを、今後は研究して共有していきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人に対し本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを口頭で説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

追手門学院大学 古川隆司

ホームレスと社会 vol.6（明石書店）

「更生保護施設における福祉の連携」

法務省（平成26年版）「犯罪白書」

《8. 提案と発信》

高齢者を取り巻く環境において、縦割り社会が生み出す「狭間」に埋もれている人へ手を差し伸べる場所が必要である。様々な福祉施設や制度がある中に、養護の存在が重要であることを忘れないでほしい。